

カントのアンチノミー論における「不定/無限背進」について —ヴォルフ派世界論との対決という視点から—

鈴木元(東京大学)

『純粹理性批判』(以下、『批判』と略す)の「アンチノミー」章は、ヴォルフ派の世界論[cosmologia]との対決を目的とする。世界論の特色は、世界[mundus]を系列の全体として捉える点にある。例えば、ヴォルフは、世界を、「相互に連結された同時的で継起的である有限的存在者の系列」と定義する(Cg §.48)。カントも同様に、「アンチノミー」章で、部分と全体、合成物と単純者、結果と原因、偶然的存在者と必然的存在者を、それぞれ条件づけられたもの[*das Bedingte*]と条件[*die Bedingung*]に対応づけた上で、諸条件から成る系列(以下、条件系列と呼ぶ)が全体性[*Totalität*]を含んだものを「世界」ないし「自然」(A418/B446)と名付けている。

この世界論的な枠組みの中で、世界系列における無限進行ないし無限背進[*progressus/regressus in infinitum*]が可能か否かが大きな問題となった。つまり、第一項ないし終項を持たない世界系列が可能かどうかという問いである。ヴォルフ派は無限進行が不可能であると認定した一方で、カントの立場は非常に入り組んでいる。このことが、「アンチノミー」章の議論を見通しよく読解することを阻む障壁となっている。それゆえ、ヴォルフ派が無限進行を不可能と判定する論拠を整理した上で、カントの立場がヴォルフ派とどのような点で異なっているのかを見極めることが、「アンチノミー」章の議論を再構成するために必要な作業となる。ヴォルフ派からカントに至る無限進行/背進をめぐる哲学史については、既に先行研究によって解明されてきた(城戸 2014; 増山 2015; Camposampiero 2021; 河村 2022)。しかし、カントとヴォルフ派の差異はまだ明確に説明されていないように思われる。本発表は既存の研究を参照しつつ、無限進行/背進の位置付けを軸にヴォルフ派とカントの相違点をより徹底的に考察し、最終的に「アンチノミー」章の錯雑とした議論に一定の見通しを与えることを目指す。

本発表の構成は以下の通り進む。まず、ヴォルフが無限進行の不可能性を主張する論拠を確認する。ヴォルフによれば、世界の中にある諸物は全て偶然的であり、その現実性の根拠を世界の内部に探し求める場合には、世界系列は無限に進行することになる。なぜなら、世界内のあるものが系列の原因である場合、その原因も偶然的なものであるため、その原因の原因がさらにあり、以下同様に無限に続くからである(DM§.579)。だが、ヴォルフは、世界系列内の偶然的諸物が「無数である[*unzählig*]」(AzDM §.201)とは述べるものの、無限進行は不可能であると考えている。というのも、系列における無限進行は充足理由律に背反するからである。充足理由律を満たすためには、世界内の偶然的諸物が存在する理由を、神という超自然的で必然的な存在者に求めなくてはならない(AzDM §.201-202; cf. Cg §.93)。

他方、バウムガルテンもまた、世界系列の無限進行が不可能であると判定する。無限進行は定義上、「相互外在的に定立された偶然的存在者から成る系列」であり、「端的な原因」を持たない。しかし、無限進行全体は偶然的存在者であるため、その現実化のための十分な理由を系列外部に持たなくてはならないのだが、その原因は必然的な存在者に他ならない。したがって、無限進行は「端的な原因」をもたざるを得なくなり、矛盾を内に含み不可能なのである(M.§.380-381)。バウムガルテンは、この世界系列

の原因である必然的存在者を、「世界外存在者[*ENS EXTRAMUDANUM*]」(M.§.388)と呼ぶ。

このように、ヴォルフとバウムガルテンは、充足理由律を論拠にして、世界系列の無限進行の不可能性を主張し、世界外部の必然的存在者の存在を証明していると、差し当たりまとめられるだろう。以上を踏まえて、『批判』の「アンチノミー」章を読み解く。

カントの場合、条件づけられたものに対して、条件を求める背進が問題となる。四組のアンチノミーは、条件系列が第一項を持ち、有限であることを主張する定立と、条件系列が第一項を欠き、無限であることを主張する反定立の対立によって成り立っている。カントによれば、数学的アンチノミーについては、定立と反定立がともに偽であるため(大反対対立)、反定立が支持されないという点で無限背進は否定される。ただし、第一アンチノミーの場合、系列の不定背進、第二アンチノミーの場合、系列の無限背進が理念として想定されることで解決が図られるが(A512-513/B540-541)、この解決方法は、人間悟性が世界の量について無限であるか非無限であるかを規定することができないという考えに基づいている(A503-505/B531-533)。他方で、力学的アンチノミーの定立と反定立はともに真であるとされるため(小反対対立)、第一項を欠く自然内部の諸原因から成る系列と偶然的存在者から成る系列が肯定される(A532/B560)。その意味では、反定立の因果系列において無限背進が可能であると主張されているように見え、不定/無限背進に関するカントの思想は複雑な様相を呈している。

そこで本発表は、無限進行/背進をめぐるヴォルフ派の論拠をアンチノミー解決の方法と比較することが、カントの立場を明確にする上で有効であるというを示す。つまり、ヴォルフ派において、充足理由律は、(a)あるものが別様ではないことが理解されるための理由があることと、(b)理由(原因)の系列を完結させる終項として世界系列外部の存在者があることの両方を含意しており、(b)を論拠として無限進行の不可能性が証明される。他方、カントはその二つを分けており、前者(a)を反定立、後者(b)を定立に対応させて、力学的アンチノミーにおいてはそのいずれもが真であると考えている。この仮説を提示することで、批判哲学における不定/無限背進の位置付けを明確にしたい。

参考文献

- Baumgarten, A. G. (1757):[M.]*Metaphysica*.(in Kants Gesammelte Schriften, XVII)
- Camposampiero, M. F.(2021): “Infinite Regress: Wolff’s Cosmology and the Background of Kant’s Antinomies” in *Kant-Studien*, 112(2), pp. 239-264.
- Wolff, C.(1737):[Cg]*Cosmologia generalis*: Frankfurt und Leipzig. —(1740):[AzDM]*Der Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, Anderer Theil, bestehend in ausführlichen Anmerckungen, und zu besserem Verstande und bequemerem Gebrauche derselben*: Frankfurt a. M. —(1751):[DM]*Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*: Halle.
- 河村克俊(2022):『カントと十八世紀ドイツ講壇哲学の自由概念』、晃洋書房。
- 城戸淳(2014):『理性の深淵』、知泉書館。
- 増山浩人(2015):『カントの世界論』、北海道大学出版会。